

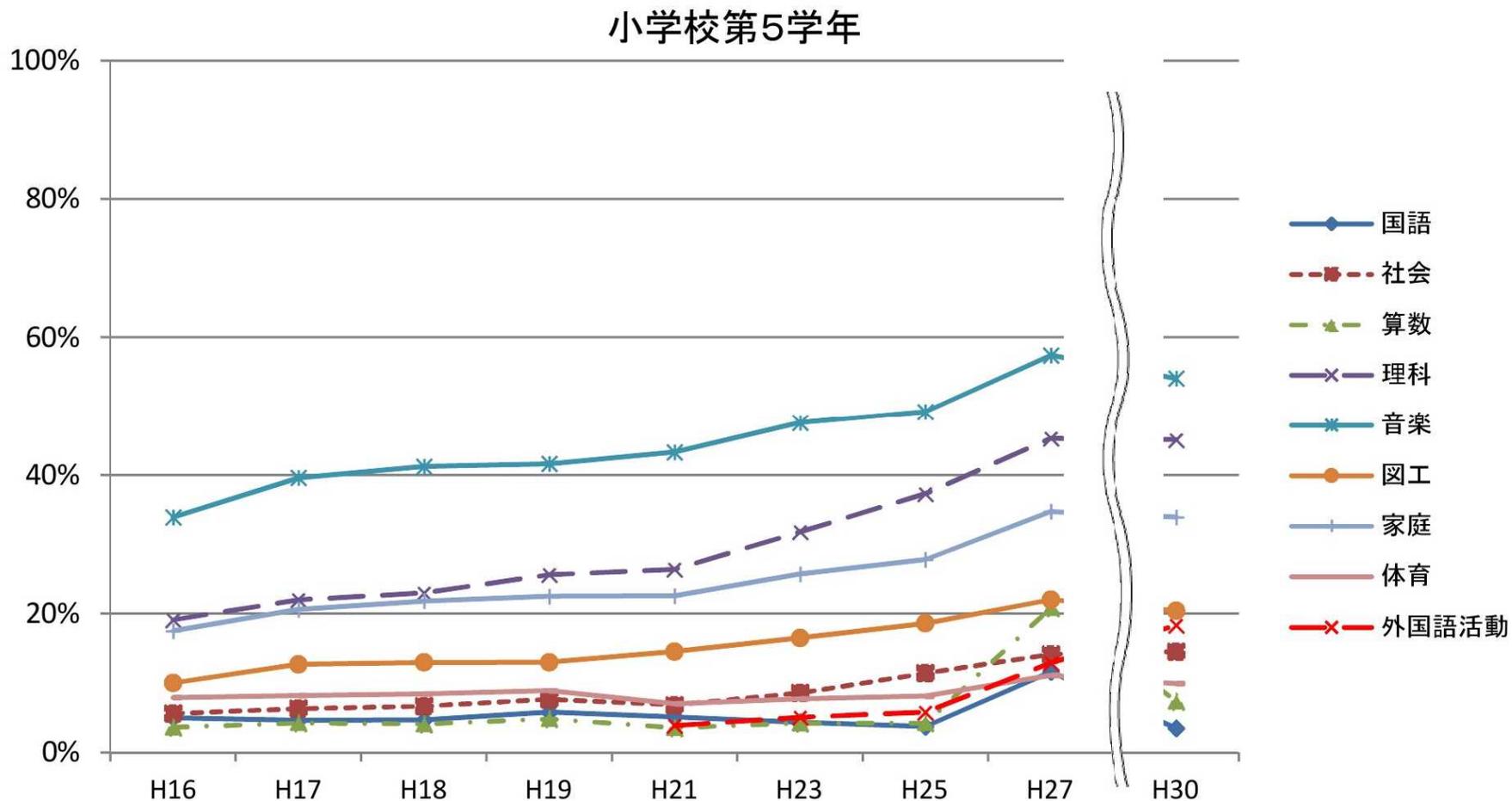
小学校等における教科等の担任制の実施状況【平成30年度計画】

	国語 (書写を除く)	書写	社会	算数	生活	理科	音楽	図画 工作	家庭	体育	外国語 活動
第1学年	1.1%	6.6%		1.5%	0.8%		12.2%	4.3%		6.1%	
第2学年	2.3%	13.5%		2.5%	1.6%		20.7%	9.8%		7.4%	
第3学年	2.4%	26.8%	6.0%	5.1%		21.6%	40.6%	16.8%		7.7%	11.3%
第4学年	2.5%	29.7%	7.4%	5.9%		32.3%	47.8%	20.4%		8.4%	12.0%
第5学年	3.4%	26.6%	14.5%	7.3%		45.1%	54.0%	20.4%	33.9%	9.9%	18.3%
第6学年	3.5%	26.8%	15.5%	7.2%		47.8%	55.6%	21.0%	35.7%	10.5%	19.3%

- *1 ここでの教科等の担任とは、「学級担任以外で、教科等(複数教科を担当することも含む)を主指導する教師」のことである。
- *2 ここには、以下の様な多様な形態のものを含む(複数の教師が協力して行う指導(TT)で実施する場合も含む。)。
 - ・教員の得意分野を生かして実施するもの。
(例)あるクラスの担任を持ちながら、得意分野である理科については他のクラスの授業も受け持つ場合。
 - ・中学校・高等学校の教員が兼務して実施するもの。
(例)地域の中学校の外国語の教員が、第6学年の外国語の時間のみ当該小学校において外国語活動の授業を行う場合。
 - ・非常勤講師が実施するもの。
(例)音楽の専科教員が、市内の複数の学校を受け持ち、当該小学校の音楽の時間のみ授業を行う場合。
- *3 各教科等の一部の領域についてのみ教科等担任制を実施している場合も含む。
- *4 年度途中から教科等担任制を導入する場合も含む。ただし、担任以外の教師による指導が継続的でない(単発で担任以外の教師が指導する等)場合は含まない。

(出典:平成30年度公立小・中学校等における教育課程の編成・実施状況調査)

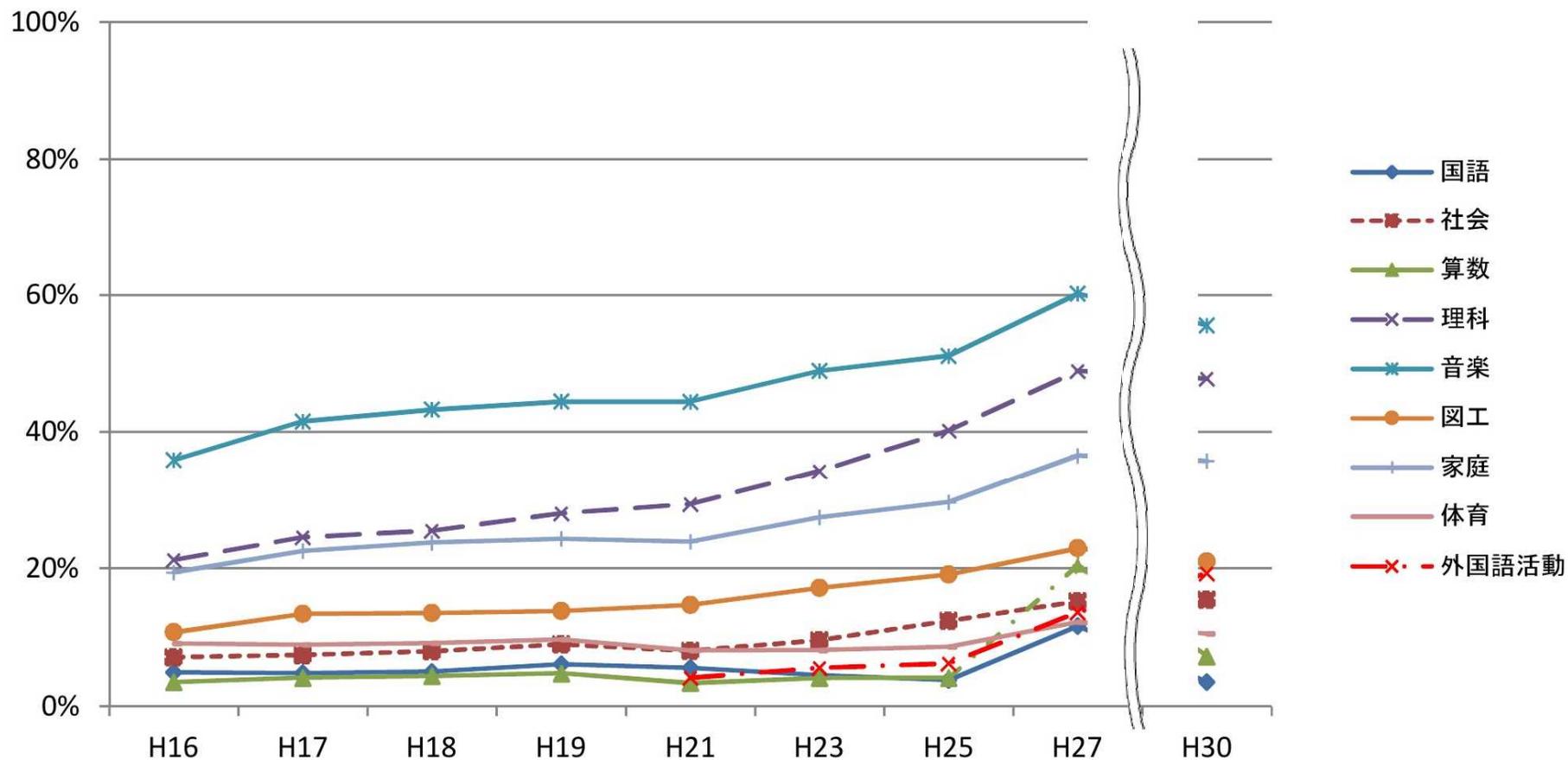
教科等の担任制の実施状況【小5・経年比較】



平成30年度調査において「教科等の担任」の定義について改めて整理したため、平成27年度までの調査結果と単純な比較はできない。

教科等の担任制の実施状況【小6・経年比較】

小学校第6学年



平成30年度調査において「教科等の担任」の定義について改めて整理したため、平成27年度までの調査結果と単純な比較はできない。

【参考】

昭和40年代の小学校における教科担任制に関する研究指定校の状況

文部省初等教育課「小学校教育課程研究指定校研究収録」昭和40-41、昭和42-43、昭和44-45、昭和48-49年

	指定年	学校規模	教科担任制の実施方法	研究成果	今後の課題
群馬県 A小	S40-41 S42-43	(学級数) 35学級 (児童数) 1,398名 (教員数) 42名	<ul style="list-style-type: none"> 学級数プラス1人(学年主任)の配置。 国語、算数、道徳、学級会は学級担任が担当し、自学級の担当時数の半分を下らないこととする。 教科担任の担当する教科は社会、理科、図画工作、家庭、体育、書写。 教科分担は同一学年内で行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 比較的得意な教科を担当すること、担当教科に対する責任感や自主的研究態度が高まることから、教師としての特性が作られる可能性がある。 教材研究や指導の準備に余裕がもてる。 多数の教師による多面的な生活指導ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科の本質に迫る教材研究 校内組織分掌等の内容と運営の体系化
神奈川県 B小	S44-45	(学級数) 24学級 (児童数) 857名 (教員数) 32名	<ul style="list-style-type: none"> 5・6年生4学級ずつの構成に対して、教科担任を兼ねる学級担任4人、理科または体育を主に担当する専科的教師2人、家庭を担当する専科教師1人、計7名で1学年の教師集団を構成。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師が自分の指導に自信を持つことが出来た。 指導過程において無駄や無理がなくなり、科学化・能率化が図られた。 空き時間を利用して教材研究など授業の準備ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 系統性や一貫性のある指導の積み重ね 教育効果を高めるための人的・物的な環境整備
大阪府 C小	S44-45	(学級数) 27学級 (児童数) 1,099名 (教員数) 33名	<ul style="list-style-type: none"> 学年は学級数プラス1名で構成し、学年主任は学級担任から外した。 自学級担当時数は、4年生は二分の一、5・6年生は三分の一を下らないこととした。 2年生からは合同授業を取り入れ、学習の効率化と高学年の教科担任制への移行をスムーズにすることをねらった。 	<ul style="list-style-type: none"> 特性をもった教師、特性をつくり出された教師の組織により、教科本質の話し合いを通して授業研究の質が向上した。 教える教科が少なくなり、教材研究が少なくなり、得意な教科なので授業に熱が入った。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究組織を学校教育計画分掌組織にうまくのせた上での有機的な活動・活発化 児童の全人間形成に向かっての学年経営の在り方の検討
秋田県 D小	S48-49	(学級数) 27学級 (児童数) 931名 (教員数) 34名	<ul style="list-style-type: none"> 4年生を一部教科担任とし、5・6年生には理科、音楽、図画工作、家庭、体育の5教科を教科担任にした。 教科分担は同一学年内で行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 学年内教師の人間関係が互いの尊敬と信頼のもとに円滑になる。 指導に責任を感じ研究的立場が専門性の向上となる。 多面的・客観的な生徒指導により、人間形成上プラスになる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育効果を高めるための分担指導の在り方や環境の整備拡充 学年間の連携を密にした、児童理解や児童の学習習慣形成
千葉県 E小	S48-49	(学級数) 54学級 (児童数) 2,114名 (教員数) 67名	<ul style="list-style-type: none"> 低学年は学級担任制で、週1時間は合同体育。 中学年は学級担任の自学級授業時数二分の一以上とし、社会、理科、音楽、図画工作において協力体制を構築。 高学年は学級担任の自学級授業時数三分の一以上とし、道徳、特別活動、算数、体育は学級担任が授業を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師個々の特性を生かした協力指導組織を確立することにより、効率的な授業実践を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育目標達成のための教育課程の有効かつ能率的な方途の追求 より望ましい学力形成への年間計画の作成 学年研修の充実 教科指導の錬成 生活指導の徹底策

学校規模については、研究収録に記載されている内容をそのまま引用している。

【参考】昭和40年代に「初等教育資料」に掲載された、小学校における教科担任制の状況

文部省初等教育課（小学校教育課・幼稚園教育課）「初等教育資料」昭和44、昭和45年

	発行年	学校規模	教科担任制の実施方法等	成果等	課題等
神奈川県	S44	-	<ul style="list-style-type: none"> 神奈川県小学校教科担任制研究連絡協議会を発足。年間4回の連絡協議会及び年間3回の教科担任制研修会を開催。 全452校中、教科担任制実施校数は142校。 	<ul style="list-style-type: none"> 特定教科への偏向の是正 学習指導の効率化 教具・施設の活用 学級差、学級王国的傾向の減少 教師の負担軽減 多面的な児童理解 学習意欲、学習習慣の深化 	<ul style="list-style-type: none"> 学校における協力指導組織の確立とその共通理解 教材内容の研究 指導性、指導過程の改造 教材、教具の工夫 生徒指導の機能を全ての教育活動に生かす
長野県F小	S44	(学級数) 26学級 (児童数) - (教員数) 32名	<ul style="list-style-type: none"> 5・6年生において、音楽・家庭の専科教諭と、一部交換による教科担任制の実施。 5年生では国語・算数・道徳を学級担任が指導し、6年生では国語・体育を学級担任が指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 各教師から感化を受け、学習に興味を持ち、児童が意欲的に学習をするようになった。 各教師の得意性が生かされ、能率的で指導効果が上がる。 中学校への移行が円滑にできる。 時間の余裕が出来て、学習環境の整理や成績物の処理が出来る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学級担任と教科担任との連絡が欠けやすい。 欠けた授業の調整や課外指導の時間がとりにくい。 個別指導が十分にできない。 学年の方針が統一していないと、足並みが乱れる。
神奈川県国立大学附属小	S45	(学級数) 12学級 (児童数) - (教員数) -	<ul style="list-style-type: none"> 一人の教師が一教科又はそれ以上の教科を担当して、互いに分業と協業の相互関係を図りながら児童を指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 教科担任が専門教科を教えることによって、学習指導が徹底し、学習効果を高め学力の向上を期待することが出来る。 教師全員が高い問題意識を持ち、互いに協力し、組織した力で教育を推進していこうとする前向きな姿勢が助長される。 異なったタイプの教師から指導されることによって各教師の人格(持ち味)に触れ、その良さを吸収し、児童の性格の偏りを防ぐことが出来る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校の実情に応じて、教員の配置・構成について一つの規範を考えておく。 4年生以下の指導体制を固め、学校経営組織の統一を図る。 特に学級担任の責任分野を明らかにする。 協力指導の形態を創造し、弾力的な指導体制を確立する。

学校規模については、初等教育資料に記載されている内容をそのまま引用している。